
IS-転生記【知的な狂戦士の物語】

ウルク・フィオナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - 転生記【知的な狂戦士の物語】

【Nコード】

N2103BA

【作者名】

ウルク・フィオナ

【あらすじ】

小説を書くことに慣れる為に始めた初めての小説です。処女作でございます。男だけど、小説を書き慣れることが目的なので、シリアスからコメディまで、良い言い方では盛りだくさん。悪く言うとかオス。
インフィニティ・ストラトス
ISの物語の世界を舞台とした異世界チート転生系の物語です。『Fate/stay night』『Fate/Zero』の両作品のバーサーカーの能力を得た主人公の支離滅裂アドヴェンチャーでございます。この駄文を読んで嫌悪感もしくは殺意。吐き気をもよおされた方は、即座にブラウザの戻るボタンを押

す事を強く勧めます。それでも、興味や知的好奇心、暇などを
持て余している方々は、優しい目で読んでいただけると光栄の至りで
ございます。また、ニートの如き強大な暇を持ち合わせていらっ
しゃる方は、至らぬわたくしめにどうかアドヴァイスをしていただ
けると酷くうれしいです。

プロローグく神様(あいつ)の悪戯く

「唐突だが、俺は今天国にいるらしい。」

死後というのは何も無い。思考というものすらない完全な無だと思っ
っていたワケだが、

どうやら違ったらしい。

真っ白な空間。雲の上だとかそんなロマンチックなところではない。
空も地面もない真っ白。地面が無い為に浮いているような気がする
し、落ちているような気もする。

右も左も景色に差異が一切見当たらない為に、自分がどこを向いて
いるのかも分からない。

このような何一つ一切合財理解のできない状況に追い込まれたとき、
人間はどうやら現実逃避を選択するらしい。

俺は、顎に親指を当てて首を45捻って、思考を少し過去に遡ら
せてみる。

。

「ダメだ。何も思い出せない。」

今日は、普通に起きて、普通に朝飯食って、普通に勉強していたは
ずなんだが……」

答えのない思考を続ける。答えを探して昨日の記憶も振り返る。一
昨日の記憶も振り返る。しかし、どこにも答えを示唆するヒントは
一切見つからない。

うつむと唸る。親指を顎から口に移動させる。カリカリと爪をかじ
り出すと、想像外のところから答え(ヒント)が現出した。

『爪を噛むのはよしなさい。クセになりますよ』

思考が止まる。歯が止まる。指が止まる。鼓動が止まる。視線が上がる。

眼球が動きを止めると、そこには人はいない。けれど、誰かが居た。そいつは突然現れた。いや、生じた？ 現出？ …… 出沒？

『出沒？ …… ふむ、確かに今の私を人間きみの言葉で表すとソレが適切かな？ …… まあいいでしょう。』

年老いた老人のように厳肅で、無垢な少女のように可憐な、人間オレが如何様な手段を以ってしても表現できない雰囲気をもとっていた。まるで、気を抜いたら、吞まれてしまいそうな、見失ってしまいそうな、薄いとも濃いとも、弱いとも強いとも……

未だ停止した思考で確信した。目の前の存在モノは、人知の及ばぬ非常バケ識モノだと。

『怪物バケモノねえ …… 未知ミステリーで強力ストロンクなのは確かですが …… 人間の定義キミタチに沿って言うなら私は、神様に一番近い者です。 …… あー、悪魔とか妖怪バケモノってのにも近いかもしれませぬえ。』

「 …… か、神？」
つい口にしてしまったのは疑ったのではなく、ただの驚きからだっ

た。
神オカルトの認識が薄れた現代日本の常識を記憶に持っていても、彼の言葉を嘘だと疑う考えが全く浮かばなかった。それが事実だと、コンマ一秒で納得できてしまった。

『 …… 精確には違いますが、まあそれでいいでしょう。』

驚きの大安売り（オンパレード）で思考が軽くなってきた。

この者のことは深く考えないのが無難だろう。いや、考えても無駄だろう。

『おまえは　　で消滅したのですよ。　だからおまえは死んでいない。けれど、生きてもいない。』

はあ、死んでいないけど、生きてもいない？　……何で消滅？

『む。人間にはこの言葉では伝わりにくいかな。……人間共に伝わる言葉で言いますと……輪廻？蘇生？降魔？　……うむ、どれも

人間共の偏見が混じっているおかげで正確な表現は無し、か。……

…面倒です。　ホイ』

パチンと『神』が指を鳴らした瞬間、俺の頭に何かが流れ込んできた。いや、染み込んできた。

「うぐおおおおおおおおおおあああああああああああ
あ！！！！！！？」

シャボン玉にプール一つ分の水を詰め込むようなものだ。知らないはずの情報が、知れないはずの情報が、海と天を引っくり返したように流れ込んでくる。

もし、今の俺に実態かいたがあつたら、確実に脳が、いや体そのものが耐え切れずに爆散していただろう。

この時に俺の精神が魂ごと崩壊しなかったのは、俺の精神力が強かったとかいう根性論ではなく、『神』があらかじめ俺の魂にプロテクトをかけ、情報封入のダメージを軽減してくれたのだろう。もちろんこの情報も今で詰め込まれたものだ。

それでも、ものすごく痛い。苦しい。辛い。　俺の全てが痛覚になったような感覚だ。

ほんの数秒の出来事だった。しかし、数兆年の出来事だった。かつて全人類が夢見た『真理』というやつが、コレなのだろう。ほんの一部だけだったが、

『真理？ ああ、確かにコレを表すには一番適した文語表現ですねえ。

ふむふむ、次から使うときは、「オヌシに真理を見せてあげよう」とでも言ってみましようかね』

何が楽しいのか満足げな顔でうんうん頷く『神』。いや、。端から見れば奇人の行動に見えるが、
がやると一つの芸術に見える。むむ、名称が変わった。まったく、時間軸ごとに名称が変化するのは面倒だな。

『だったら、適当に「神様」でいいですよ。あながち間違いいではない名称ですから』

「いや、アンタは悪魔や魑魅魍魎に近い類だと思っよ。……：伝承の内容が屑埃の如きに思えてくるほどの規格外な奴だけだな。

まあ、でも一応便宜上は神様と呼ぶことにするよ。っーか勝手に人の心を覗くな。」

『おや？ 真理を見て尚、更に私に対して態度が強くなりましたね？ 普通の人間なら腰を抜かして話もできないというのに、それに君からは私に対する恐怖がほとんど感じません』

「礼儀がどうか、気にする神ではないんだろ？ それに、一度カラクリが分かった未知への恐怖なんぞ、そいつが俺の命を狙つてくるときだけだけしか感じないよ。別に神は違うんだろ？」

『ひゃ、ひゃははははは！……！面白。面白いねえオマエは。真理を見て尚魂が崩れず、かつ私に対して対等な会話を行おうとするとは、ふっふっふっふ………』

「さて！？ 今、神魂崩れるとか言ったよな？ 配慮してくれたんじゃないの？」

『まさかあ、めんどk……：そこまで私は万能じゃないよ。せいぜい

『ができるだけだよ。』

「……人はソレを万能って言うんだよ。……まあ無事だったし、過ぎたことはいいや。……で、」

『ん？』

「俺をどうするつもりだ？自動で輪廻オートをさせずに、
（二二二）
に呼び出したってことは、違うことをするつもりなんだろう？」

『そうそう。話が早くて助かりますよ。分かっていると思いますが、私は軽い手違いで君を地上から消滅させてしまった。盤に紅茶をこぼしてしまっただですよ。』

「ッ！？ そんな適当に盤を保管しているのか？もう少し丁寧に扱えよ。……ん？でも紅茶がこぼれたくらいで、人間が消滅するものなのか？」

『その時ですね、私は目覚めたばかりで寝ぼけていましたね。つい、アナタの駒を紅茶を拭くために盤から上げてしまったんですよ。すみませんね』

「……じゃあ、俺の実体からだは？」

『突然の、なんの脈絡もない魂の強制剥奪。セーブもせずにゲームのカセットを取り出すようなものですよ。偶然さいわいにも、私のこぼした紅茶が防護壁となり君の魂を保護したおかげで、記憶データの消滅は免れたようですがね』

「……俺はどうなる？このまま記憶を剥奪されて、輪廻の渦に投げ込まれるのか？」

『ふむ。分かかって聞いてますね？アナタの実体からだは、一切の痕跡を残さずに綺麗さっぱり現世いまから消失した。もはや現世には、あなたの存在スペースできる場所がないのですよ』

「じゃあどうなる？俺は……」

『ここで私の手によって消滅』

「ッ！？」

『も、一つの手。……いや、それが一番楽なのですが。ふふふ。』

「……なんだ？」

『君には別世界で転生をしてもらおうと思います。』

「別世界？」

『先程見たでしょう？ 世界は一つではありません。時空、空間、存在軸、因果、概念、思念、運命。それらを間に挟むように、混ぜ合わせるように、反発するように、ズレるように、いくつもの世界が多数存在しています。小さいですが、人の心の中にだって世界はありますよ』

「けれど、その世界だってそれぞれが現時点で調和を維持しているのだから、俺が入り込んだら乱れてしまふんじや……」

『だからですね、君には調和を調整し易い世界に行ってもらいます。』

「調和の調節をし易い世界？」

『まあ、ぶつちやげどの世界でも私が適当にいじくれば異常はほとんど起こらないんですがね、最近 人間共のインターネットとかいので面白いモン見ましてね。「異世界チート転生物語」と言いまして面白いんですよコレが、神がやけに弱気で人間に妙な力授けたり、妙な仲間ができたり、世界を救うなんてありきたりではなく、世界を面白おかしくする物語ばかりだ。だから、私も試しにやってみようと思いましてね』

「つまり、神の暇つぶしの実験台になれ。と？」

『ご名答。その通り。ファイナルアンサー。で、どうします？ 一応拒否権つばいのを君に与えてみたりしてみる訳ですが……』

「やるよ。乗ってやる。神様の下らない暇つぶしに。このまま意味も無く消えるのは真つ平ゴメンだ。」

『ハハハハハ。じゃあ欲しい能力を要求したまえ。……そうだなあ、ラッキーセブンの7項目だけ叶えてあげますからその紙に書きなさい』

「欲しい能力？」

『なんだ？君は「異世界チート転生物語」を読んだ事無いのかい？
……アナタの人生大損ですねえ。もつたいたい』
「書き終わったぞ。」

『なんとこの華麗なスルー。そして早い！？ 神業だねえ。じゃあ私も神の業使うとするよ。……えーと、なにになに？』

1. Fate / stay nightのバーサーカーのスキルと宝具
2. Fate / Zeroのバーサーカーのスキルと宝具
3. 『狂化』の除去
4. 『神性』の除去
5. 触れたものが宝具化するのを任意で行えるようにしてほしい。
6. 全ステータスをランクAにする
7. 性別は男

『随分詳しく書いてあるねえ。』

「……………」

『ほほう。暇な授業中に「もしも願いが叶うなら」で願いたい7項目を決めていたと？ほほう。』

「う、うるせえ。いちいち口に出していうな！！ つーか、心を読むんじゃねえ」

『厨二病乙！！』

「何故神がそんな言葉を知っているんだ！？」

『神だから。それしか理由はありません ……しかし、この「神性」の除去を望んだ理由はなぜですか？』

「……………心読めるんだろ？」

『折角の娯楽なので、人間アナタの口から教えて下さい。』

「有あって損は在あっても得がないから。あと、神オマエに近い性質たちとか気持ち悪い。」

『ガーン』

「で、俺が転生する世界はどんなところなんだ？」

「また華麗にスルーされた!? …… まあ、いいです。アナタが新たに生を受ける世界は、「IS」アイエスという世界です。」

「IS? なんだそれは」

「Be動詞ではありませんよ。ISとは、人間共きみたちが生み出した英知ライトノベルの結晶です」

「ライトノベル!? え、小説の世界なんかに入れるの?」

「精確には、小説に刻まれた文字が生み出した世界。にですがね。」

高等に組み込まれた多くの言葉は人間のように世界を生み出すのです。人間の想像を利用して…… つまり、人間共おまえらの思念をエネルギーとして新たな世界を生み出すのですよ。だから、多くの人間が強い思念を持ってその小説を読めば読むほどに、その小説はひとつの世界として形作られます。」

「え、じゃあガ ダムやドラ もんの世界とかもある訳?」

「確かに存在しますが、アレは逆に方向性のバラバラな思念が集まりすぎて不安定な世界を形成している。鍋に適当な具材をポンポン入れ続けるようにね。ちなみに、東方とかいう物語の世界はとくに混沌カオス化して、私が一度消去しています。…… かなり手強かった。あそこまで思念が集まるのは恐ろしい。あと、緑のツインテ少女の世界はもはや他の世界を飲み込みかねないほど巨大化しています。」

「世界の管理はアンタの仕事。 大変だねえ」

「そのぶん面白いことが沢山ありますけどね。 さて、そろそろ転生を行いますよ」

「待ってくれ、結局そのISって世界がどんなところなのか聞いていない。」

「インファイティニット・ストラトス。通称：ISというパワードス
イツというのがキーとなる物語です。 後は自分の眼で見て来なさい。」

「ええ? それだけじゃ全然わからない」

『じゃあねー』

パチンという指の音と共に、俺は落下する感覚と闇にのまれていった。

ブローグく神様(あいつ)の悪戯く(後書き)

意味不明 いつものまにか会話をだらだら続けるだけの駄文
にorz 御見苦しいものを、本ツ当にすみませんorz orz
orz

〜主人公詳細〜（前書き）

決定ではないので設定を何度も変えると思いますのでご了承ください。

～主人公詳細～

名前：佐久由間さくゆいま

ステータス：筋力A 耐久A 敏捷A 魔力A 幸運A 宝具A

【スキル】

戦闘続行A：瀕死の傷でも戦闘可能。決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。

心眼（偽）B：直感・第六感による危険回避。

勇猛A＋：威圧、混乱、幻惑といった精神干渉を無効化し、格闘ダメージ増加する

見切りA：一度見た攻撃は本人の技術で見切る能力。

対魔力B：魔除けの指輪により対魔力を保有する。大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、彼を傷つけるのは難しい。まあ、そもそもこの世界に魔術が存在するのか妖しいが

精霊の加護A：精霊からの祝福により危機的な局面で優先的に幸運を呼び寄せる能力。発動は戦場限定。

無窮の武練A＋：一つの時代で無双を誇るまでに到達した武芸の手練。心技体の完全な合一により、いかなる精神的制約の影響下にあつても十全の戦闘能力を発揮できる。

【宝具】

・十二の試練トウェンティ：Bランク以下の攻撃を全て無効化する能力。死亡しても自動的に蘇生レイスがかかる。蘇生のストック数は十一回。また、一度死亡し肉体が学習したダメージに耐性が生まれる。

・射殺す百頭ハインライプス：ヘラクレスの所有する万能攻撃宝具。状況に応じて様々な型に変化し、また様々な武器で放つ事が可能な攻撃方法で剣や弓、果ては防具である盾ですら放つことができる。ヘラクレスは主にドラゴン型のホーミングレーザーを9発同時に放つ「対幻想種用」を用いたそうだ。

・騎士は徒手にて死せず（ナイトオブオーナー）：手にした武器に

自らの宝具としての属性を与え、駆使する宝具。どんな武器、兵器であろうとも由間が手にした時点でDランク相当の宝具となり、元からそれ（D）以上のランクに位置する宝具であれば、従来のランクのまま由間の支配下に置かれる。フェロットの策に嵌められて丸腰のまま戦う羽目になったとき、楡の木の枝でフェロットを倒したランスロットのエピソードの具現。

簡単に言えば、手にした物を武器ならなんだろうと相手の宝具だろうと自分の宝具にする能力。魔力を侵し「自分の宝具」に変えて支配するため、宝具化した物体の扱い方を把握して扱うことが出来る。故に、戦い方を碌に知らないド素人の由間でも無敗の武人へと化すことができる。機械類を宝具化した場合は宝具のように魔力で操れるようになる。例えば、そこら辺の鉄材を宝具化しても使い慣れた愛用品のように振るうことができるし、戦闘機を宝具化した場合、コックピットに乗る必要も操縦桿を握る必要もなく触れてさえいればエンジンから搭載された兵器まで自在に運用できる。

この能力の影響下におかれた武器はランクDとはいえれっきとした「宝具」であるため、サーヴァントの大きなメリットの一つである「霊体であるため物理干渉が通じにくい」を解消できる上、魔力に侵されたことで性能も元の兵器より向上していることで、サーヴァントに対しても有効な武器になる。この世界にサーヴァントが存在しないので、あまり意味の無いことだが

この能力にかかれれば単なる鉄柱がセイバーの持つ聖剣とまともに打ちあえる魔剣となり、本来自分の物ではない宝具を奪い取り扱ったり、機関砲は弾丸一発一発がサーヴァントに致命傷を与えられるようにしたり、レーダーで追尾するはずのミサイルが魔力で敵を追尾するように変えたり、さらには本来囮に使われるフレアを攻撃可能な焼夷弾にまで変貌させた。

ちなみに「徒手」とは手に何も持っていない事、またそのさま。類義語に「空拳」があり、組み合わせると「徒手空拳」（としゅくうけん）という言葉になる。意味は同じ。

・己が栄光の為でなく（フォーサムワングロウリー）：由来はランスロットが友人の名誉のために変装で正体を隠したまま馬上試合で勝利したエピソード。自らの正体を偽ることができる宝具。原作では狂化の影響でステータスを隠す程度のも物だったが、今作では完全な変装が可能。

・無毀なる湖光：アロンダイトランスロット本来の宝具。『騎士は徒手にて死せず』『己が栄光の為でなく』の二つの宝具を封印することによって解放できる。絶対に刃が毀れることのない名剣。全てのパラメータを1ランク上昇させ、また、全てのST判定で成功率を2倍にする。更に、竜退治の逸話を持つため、竜属性を持つ者に対しては追加ダメージを負わせる。由間の切り札と言える宝具と言えるが、『騎士は徒手にて死せず』の卓越した戦闘力が失われてしまうデメリットを持つので、諸刃の剣と言える。

【神へ要求した7つの項目】

- 1・Fate/stay nightのバースーカークのスキルと宝具
- 2・Fate/Zeroのバースーカークのスキルと宝具
- 3・『狂化』の除去
- 4・『神性』の除去
- 5・触れたものが宝具化するのを任意で行えるようにしてほしい。
- 6・全ステータスをランクAにする
- 7・性別は男

「ハッピーバースデー、俺」

目を開けたときに視界に映っていたのは一人の女性だった。

異常なほどに白く細い腕だが、不思議と大きく感じた。きつと、俺が小さいからなのだろう。

「お誕生日おめでとう。由間」

俺が「お母さん」と呼称する人間は、満面の笑みで俺を抱き上げた。

どうやら俺は、確かに転生をしたらしい。

最後の方の記憶は曖昧だが、確かに『神との会話』の記憶が残っている。

『真理』の記憶は残らなかった。『見た』という過程の記憶はあるのだが、その内容を思い出そうとすると思考の片隅に白いモヤのようなものが現れて途切れてしまう。

俺は、佐久由間という名前を得て生まれた。現在は、3歳の誕生日を迎えている。

この年になるまで、俺は自分が転生者であることを認識できなかった。記憶はあるのだが、それをもつて思考する能力が、幼い俺の体にはなかったのだ。正直、この精神年齢でママのおっぱいを吸うなんて羞恥プレイを体感しなかったことを幸運だと思っている。これでやっと自分でものを考えて行動ができる。未だに思考がフワフワと浮いているような感覚がするが、すぐに慣れるだろう。

俺が生まれてから、16年の月日が流れた。

生前の俺の年齢と合わせると30歳を越えた精神年齢になったと言

えるのかもしれないが、幼少期のやりなおしをただけのような気がする。最も、俺の生前にこんな『馬鹿げた出来事』はなかったがな

「全員揃ってますねー。それじゃあS H Rはじめますよー」
黒板の前でにつこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生。

身長はやや低めで、生徒のそれとほとんど変わらない。しかも服はサイズが合っていないのだろうだぼつとして、ますます本人の小柄さを強調しているように思える。また、かけている黒縁眼鏡もサイズが大きめで、若干ずれている。

なんというか、『子供が無理して大人の吹くを着ました』的な不自然さ……というよりは背伸び感か……昔の俺の周りからの評価とまるで正反対だな

「それでは皆さん、1年間よろしくお願いしますね」

「よろしくおねがいします」

「……………」

礼儀正しく挨拶を返したのは俺だけだった。最近の奴は挨拶もできねえのかよ！？ 教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰からも反応がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」
ちよつとうるたえる副担任。確かに生徒から無視されるのは堪えるだろうが、これくらいで怯んでいたら1年間もたないぞ

…………さて、困った。
なぜか。

簡単だ。俺と『もう一人』以外のクラスメイトが全員女子だからだ。今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け、その初日。それ自体はいい。むしろ喜々すべきことだ。

だがしかし、問題はとにかくクラスに男が2人しかいないという状況だ。

(これは……想像以上にキツイ……)

自意識過剰ではなく、本当にクラスメイトほぼ全員からの視線を感じる。心眼(偽)スキルを使うまでも無い。

だいたい、席も悪い。なんで真ん中かつ最前線に追いやられているのだ。一番目立つ上に否が応でも感じる注目の視線。ええい、いつも便利なこの心眼が憎い。

俺はちらりと横に目をやる。

「……………」

目が合った。何かしらの視線を求めての視線が、熱く俺に注がれていた。9年来の腐れ縁のこいつの視線は、無罪の罪で処刑台に立たされた哀れな人間のようなだった。

このまま無視するのは流石に不憫なので、俺はこいつにとって最も重要な情報を与えてやることにした。

「一夏。いいことを教えてやる」

こちらに向く視線が一気に明るくなる。その表情は、救いを得た子羊のような。だから、敬虔なる子羊には、短文で簡潔な正しい答えをくれてやるう

「オマエの番だ。」

「織斑一夏くん。」

「は、はい!?!」

突然先生に呼ばれた一夏は、裏返った声で返事をした。案の定、くすくすと笑い声が聞こえてきて、一夏はますます落ち着かない表情になる。

立ち上がる寸前の彼の視線。まるで『謀ったな、シャ』とでも言い出しそうな目だった。

「あ、あの、と、突然話しかけちゃってごめんなさい。お、怒ってる? 怒ってるかな? ごめんね、ごめんね! でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だ

からね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

副担任の山田真耶先生がぺこぺこ頭を下げていた。あんまり頭を何度も下げるので、微妙にサイズの余る眼鏡がずり落ちそうになっている。それにしても、この人は本当に教師なのだろうか。俺の心に不安が陰る。 2度目の高校生活ぐらい平穩に満喫したんだがなあ

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていつか自己紹介しますから、先生落ち着いて下さい。」

流石の一夏もお困りのようだ。……俺の番が回ってきたら流れるように済ませよう。

「ほ、本当？ 本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ。絶対ですよ！」

がばつと顔を上げ、一夏の手を取って熱心に詰め寄る山田先生。……クラス全員の注目が、現在一夏だけに向けられている。

一夏は「大丈夫ですよ」と言いながら優しい手つきで山田先生の手を外し、しっかりと立って、後ろを振り向いた。

今まで背中に感じていただけの視線が一気に向けられているのを感じてしまったのだろう。一瞬身じろいで、僅かに後ろへ下がる。

この場で唯一一夏に視線を向けていないのは俺だけだ。

「えー……えつと、織斑一夏です。よろしく願います」

儀礼的に頭を下げる織斑一夏くん。 え、何？ それだけかい？

もう喋ることはないぞ。と、一夏は更に身じろいで後ろの机に足が軽くぶつかる。

別になんでもいいじゃん。趣味とか嗜好とかさあ、料理が得意だとか、中学ではモテモテのハーレムやってましたとか。 人間同士の最初のコミュニケーションには話すきつかけが不可欠なんだよ。この際、嘘でもいいから万人受けしそうな趣味かなんかを言っておけ。

「……………」

だらだらと冷や汗を流しながら再びこちらを向いてくる一夏。ど
うしたらいい？自分で考える。

俺からの救いの期待値がZeroだと確信したのか。今度は窓際
にいる我らが幼馴染、篠ノ之箒へと視線を移し変えた。しかし、
ふいと視線を外され一夏は完全に孤立する。

「　　というか、何で俺がここにいるんだ？」

小さな声でぶつぶつと呟く一夏。その疑問は、俺だって同じなんだよ

〜狂気の鼓動〜

「「うー、寒っ……………」」

2月の真ん中、俺は中学3年。受験の真っ只中だった。と、言っても前世でそれなりに勉強のできた俺は、軽い復習しただけで余裕を持っていられた。

この1年で苦労したのは織斑こいつ一夏だ。

「なんで一番近い高校の、その試験の為に4駅乗らなきゃいけないんだ……。しかも今日、超寒いじゃねーか……」

ブルブルと震えながら自分自身を抱きかかえる一夏が愚痴る。俺も愚痴りたい気分だ。正直、自分で走って行った方が速いし楽なんだが、一夏と行く約束したしな。それに寒いし

「仕方ないな。昨年起きたカニンング事件のせいで各学校が入試会場を2日前に通知するという政府のお達は、確かに無茶苦茶な訳だが、所詮俺達は一介の中学3年生。何時の世も、お上の決定には逆らえないってな。」

異世界と言っても、この世界は元の俺の世界に限りなく近い。

俺はこの世界を作り上げた原典である物語を知らないからなんとも言えないが、この世界にはホーキに跨って空を飛ぶ魔女はいないよ。うだ。おそらく学園モノのコメディ小説かなにかだろうな。……そう、俺は推測していた

「いつまでも千冬姉に世話になってるわけにもいかないしなあ……………」
一夏の家は少し特殊で、両親がいない。織斑千冬という年の離れた姉が養っているが、一夏はそのことに長年引け目を感じていらしい。

「そうだな。いつまでもシスコンを続けるのは問題だからな」

幸い、千冬さんの稼ぎは良いらしいから、貧乏ではない。何度か奢

ってもらったりしたこともある。一夏には、それがまた無理させているようで心苦しいらしいが。

本当は中学を出てすぐ働くつもりだったらしく、そのときは俺と千冬さんが全力で止めた。今のご時勢で中卒は厳しいものがある。その現実には、世界が変わろうとも揺るがない。

「よし、受かるぞ!!」

でもまあ、この私立愛越学園に入れば就職も決まったも同然。一夏は千冬さんを楽にさせてやれると意気込んでいる。本人は

全く苦に思っていないのだがな。こいつの鈍さは筋金入りだ。…まあ、いつまでもすねをかじる根性無しではないこともコイツの良いところなんだがな。

「あまり緊張するな。受かれるものも受かれなくなるぞ」

俺は正直どの高校へ行っても良かった。この身体能力でスポーツ選手のプロでもやって楽に生きるつもりだったから。2年生の時点で、模試での判定はA。余裕で合格できる。

けれど、一夏は違う。3年の夏休みの頃はD判定で、合格が相当危うかった。だが今は判定A。一重に一夏の努力の賜物だ。こればかりは賞賛に値する。ただ、手伝わされた俺の精神力が相当減らされたがな。

普通に受ければ普通に受かるはずなので、俺達はたいした緊張もなく会場に入る。一夏は場所と名前だけは知っているようだけど、どこにあるか知らないという。……まったく手のかかる友人だ。俺は調べた記憶を頼りに多目的ホールの中を詮索する。一夏が緊張しすぎて1時間ほど早く来たせいか、人がほとんどいない。って、アレ？

「えーと……あれ？ 2階への階段ってこっちじゃなかったっけ？」

「またか!? また、オマエの方向音痴スキル発動なのか!? 由間」
「いかん、迷った。なんて分かりにくい構造をしているんだ。設計は

地域出身のデザイナーに頼んだらしいが、ふざけた設計しやがつて「イラつくなあこの、『俺のデザインに常識は通用しねえ』的な構造は……。階段はどこにあるんだよ……」

真剣に、迷路だと言われれば納得して騙されるレベルだ。なんでこんなに分かりにくい上に案内図がないのか。あの一面ガラス張りの廊下は空調効率落ちるだけじゃないか！ この意味無く壁に貼られたタイルは地震のときの安全性をしっかり考慮されているんだろうな？ あの埋め込み型の照明はランニングコストかかるじゃないか。それに交換の労力が無駄にかかる。この無駄に高い天井は何を意図して作ったんだ？ うーむ……。

「……………」
やめてくれ一夏。俺をそんな目で見ないでくれ！

こんなときに役に立たない心眼は、ホント使えない。道案内ナビ機能ぐらいつけろよ

「ええい、次に見つけたドアをぶち壊すぞ、俺は。それでだいたい正解なんだ」

「壊すな、開ける！」

おっと、ナイスタイミングでドアが。ちょっと入りますよ？

「あー、君達、受験生だよな。早いわねえ。はい、向こうで着替えて。」

部屋に入った途端、温和そうな女性教師に言われる。のほほんとした声で、ゆったりと向こうの部屋を指差す。だが、なにか大切な書類でも読んでいるのだろうか。こちらも見ずに指示を出してきた。

（着替え？ はて、今日日の受験は着替えまでするのか？ カンニング対策にしてもやりすぎな気がするが？ まあ、業に入れば郷に従え。大変だなあ、どこの学校も）

そう思つてカーテンを開けると、奇妙な物体が2つ鎮座していた。なんと表現しようか？ 『お城に飾つてある中世の鎧』だ。厳密には

細部が甲冑とは違うし、たぶん人によつては鎧とは違う印象を得ることもあるだろう。Fate/Zeroのランスロットのような完^{フル}全武装ではなく、頭部と胸部だけ無い。

それが、忠誠を誓う騎士^{ナイト}のようにひざまづいていた。それは人型に近いカタチをしていて、使用されるときをただ黙って待っている。

知っている、これは『IS』だ。

正式名称『インファイティニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作り上げられたマルチフォーム・スーツ。

しかし『製作者^{アイツ}』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持って余した機会は『兵器』へと変わり、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた。所謂^{いわゆる}、飛行パワードスーツだ。

まったく、『裏』を知っている俺からすれば世界中の有権者をブチコロシタクナル建前だ。

しかしこの『IS』には致命的な欠陥がある。それが製作者^{アイツ}のただの失敗なのか、それとも意図してやったことか。どちらにせよ。その欠点のせいで俺にとっては何の意味もなさない。

「男には使えないんだよな、たしか」

そう、一夏の言うとおり。この機械は女にしか反応しないのだ。

……なんか今変態チックだと思つた俺はおかしいのだろうか
そしてこの機械は、俺の『騎士は徒手にて死せず（ナイトオブオーナー）』の効果も受け付けない。原作では戦闘機すらも自らの宝具として扱っていたのに、『兵器』であるはずのこれには一切反応しなかった。

だから、今日の前にあるのは俺達にとってマネキンと同じだ。何もしない、できない、ただの物体だ。

そう思って、触れた。

俺と一夏がISに触れたのは同瞬だった。刹那のブレもなく、同時にそれぞれの機体に触れていた。

このとき、俺は『騎士は徒手にて死せず（ナイトオブオーナー）』を『ON』にしていた。無意識に。なにかに操られるように。それが自然なことであるように。

理性無き本能による行動。

俺の中に狂戦士バーサーカーを感じ取った

のは、これが初めてだった。

「一夏の姉は三国志の英雄!?!」

Side: 織斑一夏

「!?!?!」

キンツと金属質の音が頭に響く。

そしてすぐ、意識に直接流れ込んでくるおびただしい情報の数々。数秒前まで知りもしなかった『IS』の基本動作、操縦方法、性能特性、現在の装備、可能な活動時間、行動範囲、センサー精度、レダーレベル、アーマー残量、出力限界、etc……。まるで長年熟知したようなもののように、修練した技術のように、すべてが理解、把握できる。

そして視覚野に接続されたセンサーが直接意識にパラメータを浮かび上がらせ、周囲の状況が数値で知覚できる。

「な、なんだ……?」

動く。動くのだ。『IS』が。それも自分の手足のように。

肌の上に直接何か広がっていく感触 スキンリアー 皮膚装甲展開、……完了。

突然体が軽くなる無重力感 スラスタ 推進機正常作動、……確認。

右手に重みを感じると、装備が発光して形成されていく 近接ブレード、……展開。

世界の知覚精度が急激に高まる清涼感 ハイパーセンサー最適化、

……終了。

それらすべてがわかる。知りもしないのに、習ってもいないのに、わかる。

そして『IS』から送られてくる情報で見る世界は、まるで

「……………」
えーと。

状況を再確認するぞ。今俺は高校1年、入学式当日。絶賛自己紹介の真っ最中。目の前に広がるのは28名の女子。後ろには、たぶん半無きの山田先生。隣には、前を向いたまま顔を手で覆って笑みを隠そうとしている佐久由間^{わがしんゆう}。
で、自己紹介が終わるに終われない俺。なんせ目の前の女子は『もつと聞きたいなあ!』という期待に満ちた視線を俺に送り続けている。

おい、箒、幼馴染のよしみで助けてはくれまいか。隣の由間^{こいつ}は全く役に立たないんだ。あ、目そらしやがった。薄情者。感動の再会はどうした。そんなのないけど。

(いかん、マズイ。ここで黙ったままだと『暗いやつ』のレッテルを貼られてしまう)

俺は呼吸を一度止め、そして再度息を吸い、思い切って口にした。

一瞬となりを見たら口を三日月にした由間^{あくま}がいた。

「以上です」

がたたつ。思わずずっとこける女子が数名いた。どんだけ期待してるんだよ。無茶言つな。そして隣の由間^{コイツ}は、とうとう堪え切れなくなって笑い出していた。クラスの女子が若干引いてるぞ、後で後悔しやがれ。

「あ、あの一……………」
背後からかけられる声。涙声成分が2割増している。え?あれ?ダメでした?

パアンツ! いきなり頭を叩かれた。

「いつ　！？」

痛い、と言う無脊椎反射より、あることが頭をよぎった。

この叩き方　威力といい、角度といい、速度といい、とある人物
良く知っているがあるとある人物が同じような感じなのですが……。

「……………」

おそろおそろ振り向くと、黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、良く鍛えられているが、けして過肉厚ではないボディライン。組んだ腕。狼を思わせる鋭い吊り目。

「げえっ、関羽！？」

パンツッ！　また叩かれた。　隣でとうとう腹を抱えて笑い出した由間も殴られた。　ちなみにすっげえ痛い。　隣の由間は全く効かないとでも言うように笑い続けている。　殴った千冬姉の方が手をさすっている。

その音があまりも大きいから、見ろよ女子が若干引いてる。　あと千冬姉大丈夫かな？

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者。　それと佐久。　いい加減笑いを止めろ」

トーン低めの声。　しかし、どこか涙声が混じっている気がするのはどうしてだろう、はて。

いやしかし、待て待て待て。　なんで千冬姉がここにいるんだ？

職業不詳で月一で、二回ほどしか家に帰ってこない俺の実姉は。

「あ、織斑先生。　もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。　クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

おお、俺は聞いた事も無い優しい声だ。　関雲長はどこへ？　赤兎馬に跨って去ったのか、劉備の元へ？

「い、いえっ。　副担任ですから、これくらいはしないと……」

さっきの涙声はどこへやら、副担任の山田先生は若干熱っぽいくらいの声と視線で担任の先生へと応えている。　あ、はにかんだ。　隣の由間はまだ腹を抱えて震えている。　あ、千冬姉がまた殴った。

「……諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を1年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。」

私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

なんとこの暴力宣言。間違はなくこれは俺の姉・織斑千冬。

だがしかし、教室には困惑のざわめきではなく、黄色い声援が響いた。

「キャ　　！　千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！　北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるとは嬉しいですよ！」

「私、お姉さまの為なら死ねます！」

「wwwwww、関羽wwww。関w雲w長wだwつwてwよwww」
きゃいきゃい騒ぐ女子達を、千冬姉はかなりうつつとうしそうな顔で見る。　それと、最後の由間ヤッは顔面を蹴られた。靴で、

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

で？　挨拶もまともにできんのか、お前は」

辛辣。しんらつ　極めて手厳しいという意味。　まさに俺にかけ

た姉の言葉はそれだった。

「いや、千冬姉、俺は　　」

パアンツ！　本日3度目。　ついでに由間にも4度目が与えられた。

……もう笑っていないのに

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

と、このやりとりがまずかった。つまり、姉弟なのが教室中に

バシた。

「え……？ 織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界でただ二人だけ男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

「じゃあ、あの佐久つて人も千冬様の関係者なのかな？ ヤケに親しそうだし」

最後のは、どこをどうみれば親しく見えたのか一度詳しく聞きたいものだ。別に仲が悪い訳でもないんだが

俺は今、世界で唯二人だけ『IS』を使える男としてここ、公立IS学園にいる。

隣にいる由間も同じだ。

IS学園と言うのは、

ISの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営及び資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。ただし、当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また黙秘、隠匿を行う権利は日本国にはない。また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し、協定参加国全体が理解できる解決をすることを義務づける。また入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者には無条件に門戸を開き、また日本国での生活を保障すること。 IS運用協定『IS操縦者育成機関について』の項より抜粋。

という学園なわけだ。

分かりやすく言うと、『アナタノ作ッタISノセイデ世界八混乱シテルカラ責任モツテ人材管理ト育成ノタメノ学園ヲ作ツテクダサイネ。ソコノ技術ハクダサイネ。ア、運営資金ハ自腹デオネガイシマスネ』ということ。酷いマフィアだ、某自由の国。 他者の国の自由を奪わないで欲しいよ。

(で、何で俺達はその学園にいることになったのか……というのは、IS学園の試験会場でテスト用ISを動かしたからなんだけど、そ

もそもなんでそこに行つたかつていうのは……)

由間の方向音痴ぶりは、筋金入りだつてこと。……そういうことなんだ。

「……………」

ふと、まだ興奮冷めやらぬ教室内から、低温の視線を感じる。

見ると、さつきまでの窓の外に視線を向けていた簿がこつちをそれとなく見ていた。ん？由間を見ているのかな？どつちだろう。

まあ、あとで話しかけてみよう。

そんなことを思っていると、チャイムが鳴つた。

S i d e O u t ;

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

おお、なんとという鬼教官。関……千冬さんは相変わらず恐ろしいなあ。第一世代IS操縦者の元日本代表は迫力が違うな。……まあ、比較対象の先生が、あんな小動物のようだから余計に強く感じる。公式試合の戦歴は無敗の最強のIS操縦者。世間では突然の引退騒ぎに一時期荒れていたが……そういえば、一夏の奴は彼女が学園の教師をしているのを知らないんだっけ？

「席に着け、馬鹿者」

一夏が席に着かされる。その後、ギロリとこちらを向く千冬さんマジ怖い。しょうがないじゃん、突然関羽だなんて言われたら誰でも笑いは堪えられないよ。

「唸れ、背負い投げ！」

「あー……」

疲れた。精神的に、かなりのダメージだった。

あれから自己紹介の順番は周り、俺の番が来た。

俺の自己紹介の時も相当の注目を浴びせられた。だが、俺は自己紹介の内容をあらかじめ決めていたので、言うことだけ言ってすぐに終わらせた。とするつもりだったんだが、まさか質問攻めにされるとは考えていなかった。先程の仕返しのもりなのか、千冬さんは中々止めてくれなかった。

なんか、根掘り葉掘り聞かれて、途中から一夏と筭すら驚く内容まで聞かれた。もちろんはぐらかしたが

多分、俺の特技、趣味、好きな食べ物、好きな本、好きな映画、好きな人等々、クラスの全員に知れ渡ることになった。

ちなみに質問の答えは、特技：料理、趣味：読書、好きな本：西洋物語系、好きな映画：ガンアクション系、好きな人：特に無し、と答えておいた。一切の嘘を混じえていない。

「……………」

そして1時間目のIS基礎理論授業が終わって今は休み時間。教室内には異様な雰囲気があった。隣の一夏は何もしゃべらずに静止している。

ちなみに、IS学園ではコマ限界までIS関連教育をするため、入学式当日から普通に授業がある。学内の案内？ 地図を見るとさ。

俺に迷い死ねと申すのか!?

「なあ、どうにかならないのかコレ……」

小声でひそひそと話しかけてくる一夏。俺達以外が全員女子。それはクラスだけではなく、学園全体がそうなのだ。

ちなみに『世界初のISを使える2人の男』というのは世界的にもニュースになった。当然学園関係者から在校生までみんな俺達のこ

とを知っている。今朝この教室に入るときだって、廊下で何人の人間に声をかけられたことか

ニユースになつた当時。インタビューがあまりにも鬱陶しかったから、俺は2度目の生を受けてから2回目の『己が栄光の為でなく（フォーサムワズグロウリー）』を使った。初めて使ったのは幼稚園の頃に、使えるかどうかを試したときだ。だから、実質この能力を活用したのはこの時が初めてだった。

というわけで現在、廊下には他クラスの女子、2、3年生の先輩らが詰め掛けている。これじゃあトイレにも行けやしない。

しかし女子だけの空間に馴染んでしまっているのか、中々俺らに話しかけるといふことはしない。それはクラスの女子も同じで、『あなた話しかけなさいよ』という空気と『ちよつとまさか抜け駆けする気じゃないでしょうね』的な緊張感が満ちている。

ちなみにIS学園は世界でここ一カ所しかないのだが、ここに入学する為の事前学習としてIS学習を事業に組み入れている学校は多い。

そしてその学校は100%女子校。つまり、この学園の女子はほとんどが男子に免疫がないわけで、しかも世の男というのは非常に辛い立場にある。

ISが発表されてから今年で10年になるが、世界は激変した。現行の戦闘兵器はISの前ではただの鉄屑に等しく、それ故に世界の軍事バランスは崩壊。しかも開発したのが日本人だったので、日本は独占的にIS技術を保有していた。あの時の日本の政治家共の調子の乗りっぷりには本当に腹が立った。開発者の努力の成果を当然のように要求してきやがった。あまりに腹が立ったんで、国会議事堂を『射殺す百頭』^{ナインライブス}でぶっ壊したのはしょうがないよね

当然危機感を募らせた諸外国はIS運用協定 通称『アラスカ条約』によってISの情報開示と共有、研究の為の超国家機関設立、軍事利用の禁止などが決められた。……表向きはな

そうすると、今度はIS操縦者がどれだけ揃っているかという点が、

即その国の軍事力（表向きは有事の際の防衛力）へと繋がる。そして操縦者は当然女……となると、どの国も率先して女性優遇精度を施行した。

これによって『女≠偉い』という構図はあっという間に浸透し、この10年で女尊男卑社会の完成となった。

そこに突然対等の立場の『男』が現れると、当然まず第一に好奇心が湧くというわけで……。まあ、気に食わないって奴の方が多いんだがな

（そして、この状況か）

ちらりと隣の女子を見ると、それまで俺らに向けていた視線を慌ててそらす。しかも『話しかけて！』『Please take me』という雰囲気はそのままに。

しかも、片や元日本代表で全国女子の憧れ、織斑千冬弟である一夏がいるのだ。ますます話はややこしい。

（ああ、面倒くさい……）

ふと、旧友の五反田のことを思い出す。あいつは俺らをうらやましいとずっと言っていたが、代われ！今からでも遅くは無い。『己が栄光の為でなく（フォーサムワンスグロウリー）』を使ってでもお前と代わりたいたいよ。

「……ちよつといいか」

「なんだ、箒？」

「え？」

突然話しかけられた。一瞬女子同士の牽制に競り勝った猛者かと思つたが、目の前にいたのは、1年ぶりの再会となる幼馴染だ。一夏にとつては6年ぶりの再会だろう。

篠ノ之箒。俺達が通っていた剣術道場の子で、髪型は今も昔も変わらぬ味を保ち続けるポニーテール。肩下まである長い髪を結うりボンが白なのは、やはり神主の娘だからだろうか。

身長は平均的な女子のそれだが、長年剣道で培った体はどこか長身を思わせる。少し不機嫌そうに見える目は生まれつきと本人曰くだ

が、……十中八九、一夏が原因なのだろうな。アイツの鈍さはFateの英雄王ギルガメッシュの傲慢よりも強いだろう。

どこか日本刀を思わせる印象、と一夏は評価していたが。俺からすれば、ただの恋焦がれる少女としか思えない。空白の6年が二人を分けようとも変わらぬその恋心を向けられる一夏がうらやましく思える。

「廊下でいいか？」

教室では流石に話しにくいだろう。できたら俺もこの状況から抜け出したいところだが、流石に馬に蹴られるのは御免だ。人の恋路を邪魔するのはなによりも嫌悪する行為だからな

「早くしろ」

「お、おう」

すたすたと廊下に行ってしまう筈。そこに集まっていた女子がざあつと道を空ける。現代のモーゼを見た気がする。

「あれ？ 由間は行かないのか」

後ろから追従しようとした一夏が動きを止めてこちらを振り向く。

……空気読めや！

「俺はいいよ。久しぶりの再会だろ？ 二人つきりで話しなよ」

「お前だつて久しぶりの再会じゃないか。一緒に来いよ」

遠まわしに言わずに直球で言ったが、効かず。

「俺は去年会っているから。剣道の大会で」

そう、男女別枠だから戦うことはなかったが、去年俺は会場で筈と会った。

「そっぴいや二人共優勝したんだっけ？ 凄いな」

去年と同じ会話を繰り返す。いいからさっさと行ってやれよ。筈が廊下からこつちをちらちら見ているぞ、

「……そっぴいいう訳だから、いつてらっぴい！」

「それでも1年ぶりの再会なんだから、お前も来いよ。」

「……」

こいっはッ

その後は……いや、よそう。

一言だけ言っと、言葉で理解できない友人ほかに実力で教えてあげた。

前世で中学3年間続けてきた柔道の技術力と転生で得た馬鹿げた力を利用した本気の投げで、廊下に吹き飛ばしてやった。壁に叩きつけられた一夏が潰れた蛙のような声をあげた。……生きてるよな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2103ba/>

IS-転生記【知的な狂戦士の物語】

2012年1月5日19時46分発行